

# 4・19 法大-文科省へ!

2012年4月2日  
16

Tel 050-3036-6464  
mail\_cn001@zengakuren.jp  
http://www.zengakuren.jp/

全学連(斎藤郁真委員長)書記局通信

## 4・19法大闘争へ① ～法大闘争の歴史～

新入生の皆さん。4・19法大-文科省闘争の大爆発に向かって、改めて新自由主義大学と対決してきた法大闘争の意義と歴史を確認していきたい。

### 「ビラ・立て看板」規制と3・14法大弾圧

2006年2月27日、法大当局は突如「学内におけるビラまき・立て看板設置」を規制する「ルール」を打ち出してきた。ここから今に至る法大闘争は始まった。

これは表現規制であると同時に、学生同士の分断・団結破壊を狙う新自由主義攻撃そのものとしてあった。これに対して、全学連は織田陽介委員長(当時)を先頭に3月13日、14日と連続的にデモに立ち上がった。

そして3月14日、断じて許すことのできない暴挙に法大当局は手を染めた。法大当局はデモから帰ってきた全学連のデモ隊29人の前で「立て看板を撤去します」と宣言し、抗議した29人をあらかじめ用意していた公安警察200人を使って全員不当逮捕させたのだ。これがいわゆる「3・14法大弾圧」である。ここから現在118人にまで拡大した弾圧との激しい死闘戦に入っていく。



「ビラ・立て看板」粉碎を呼びかける看板(左)と逮捕映像(右)



### 弾圧粉碎と処分撤回闘争の始まり

3・14法大弾圧に対してただちに全国の労働者・学生から怒りの声が巻き起こり、29人全員が完全黙秘・非転向で25日に不起訴釈放を勝ち取った。しかし法大当局は逆に逮捕された法大生5人に対して退学・停学処分を下し、新自由主義大学路線を強めていった。

法大生は「不当処分撤回」を掲げ、学生の団結のみに依拠して闘いぬいてきた。06年6月15日にはキャンパス中央に1000人の学生が結集して集会を打ち抜き、法大当局を追いつめていった。

法大闘争は大弾圧・新自由主義攻撃に対して「闘えば勝てる」ことを示している。これは動労千葉の外注化阻止決戦勝利の地平と同じ、全国・全世界の「希望の星」そのものである。絶対に勝利しよう。

## 「原発再稼働阻止! 不当処分撤回!」 法大包囲デモ

4月19日(木) 正午 法政大学市ヶ谷キャンパス  
正門前集合

## 文部科学省申し入れ-包囲行動

4月19日(木) 15時 経済産業省前テント集合  
「20リシーベルト基準」撤回を求める申し入れ書を提出します。  
行動終了後の18~20時に屋内会場で総括集会を行います。



昨年10月21日、福大生とともに福大キャンパスで集会!

## 「一人の仲間も見捨てない」文化連盟の決起

2007年、法大当局と権力は起訴攻撃など弾圧をさらにエスカレーションさせると共に、文化連盟をはじめとした学友会＝学生サークル団体の解体を強行しようとしてきた。学生は激しい討論の末、文化連盟だけは斎藤委員長体制を確立し学友会解体攻撃に絶対反対を掲げて闘いぬいた。

08年は法大当局の偽装職員「ジャージ部隊」が登場し学生に暴力をふるうと共に、文化連盟副委員長・恩田亮君に対して新たな処分攻撃が加えられた。文化連盟は「一人の仲間も見捨てない、これ以上の大学の暴挙を絶対に許さない」という決起要項を発し全学連と血盟を結び、新たな法大闘争が開始されたのである。そして09年4月24日には1500人の結集で総決起集会が闘われた。

文化連盟の決起はまさに激しい弾圧・処分攻撃の中から学生の団結を甦らせ、新自由主義大学のあり方を根本から覆すものとしてあった。それは文化連盟委員長である斎藤君が現在全学連委員長に就任し、全国学生のリーダーとして屹立し、いま反原発闘争の最先頭で闘いぬいていることに端的に示されている。



08年6月、170時間を貫徹した斎藤文連委員長



弾圧体制うち破ってキャンパス中央で集会を行う文化連盟（写真上）と学生に暴行を加えるジャージ部隊（写真左）



09年4・24法大解放総決起集会と総長室デモ



不当処分撤回を掲げて闘われた08年5.29法大デモ（38人不当逮捕、20人起訴）

### 三里塚援農に参加した学生の感想

私は3.11の原発事故がおこる前から、原発で働く労働者が被曝していく、いわゆる「労働者被曝」の問題に関心があった。しかし3.11がおこってから、それにとどまらない原発のあらゆる矛盾が浮かびあがってきた。私はこの日を境に、大学では原発のことを勉強しようと考えた。そこで2011年の4月には、山口県上関町の祝島という、30年にわたり中国電力の上関原発誘致反対を掲げる小さな島に行き、地元の方にお話を聞いた。彼らが一様に口をそろえて言うのは、中国電力（中電）の陰湿さと非倫理的な強行、そして自分たちの団結の固さである。

大きな問題ではよく沖縄の基地問題も同じだと言われる。それは知っていた。しかし私は正直なところ、成田に来て、裁判に行き、現地の方にお話をきき、闘争のビデオを視聴し、空港を見るまで、三里塚闘争がこのような問題と全く同じなんだと意識していなかった。

今年で90歳になられるという、闘争でリーダーだった北原さんにお話を伺った。北原さんは青年時代の海軍に入

るまでの経緯や、闘争前後のことについて語った。「ここ（成田）には1000戸、約3000人の人たちが反対しとった。しかし絶対反対を掲げる人は6割で、残りは条件次第で農地を売ってもいい条件派だった。わたしは『北原さんがリーダーになってくれ』と言われてリーダーになったが、絶対反対から条件派にうつった人を責めたことは一度もない。彼らには彼らの自由がある。」「私は君たちがここに来てくれただけでうれしい。しかし君たちに三里塚闘争をこれから引き継いでいけと命令するつもりはない。だけど私が生きてる間は、一緒にやっていきたい。私もまだまだ現役だから。」そう言って笑った北原さんと、握手をして別れた。私は自分の無知と覚悟のなさを恥じた。しかしその反面、彼に会って、また来たい、と強く思った。

市東さんの自宅近くを通ったとき、飛行機が真上をとんだ。ものすごい爆音、そしてこの近さ。空港を利用する人の一体どれほどの人が、こんな近くに人が何十年も生活していると知っているだろうか。想像すらしないだろう。他人のことではなく、現に私がそうだった。

三里塚闘争は終わっていない。そう実感した。